

令和6年度第1回京都市次代の左京まちづくり会議 議事録

1 日時

令和6年7月4日（木）午前10時から正午まで

2 場所

左京区役所3階 中会議室1

3 参加者（50音順）

(1) 出席委員

上田委員、岡本委員、川勝副座長、河野委員、熊谷委員、中野委員、長谷川委員、
廣瀬委員、藤森委員、宗田座長 計10名

(2) 事務局

森元左京区長、船木副区長（地域力推進室長）ほか

4 次第

(1) 開会

(2) 議事

- ・ 「左京区基本計画（第3期）」令和5年度の取組状況について
- ・ 令和6年度持続可能なまちづくり支援事業予算について
- ・ 左京区の人口減少対策事業（「京都市移住・定住応援団」との公民連携の推進事業（地域特性を踏まえた移住・定住促進トライアル事業））について

(3) 閉会

<区長挨拶>

- ・ 本日は、左京区基本計画に基づく左京区のまちづくりについて、進捗状況等を共有させていただく。
- ・ 区基本計画の上位計画である、京都市の次期総合計画の見直しが始まっており、区基本計画等も今後議論されるため、委員の皆様と情報を共有しながら進めていきたいと考えている。
- ・ 先日、7月2日に左京区役所で市長との「市民対話会議」が開催された。松井市長が地域の方と直接話をしたいということで、市政協力委員の方や事業をされている方など、幅広い分野の28名の方をお招きし、意見交換を行った。
- ・ 市民との対話を重ねることで、より良い、各地域に根差した運営方針や計画が出来ていくものだと考えている。我々も、様々な方の御意見を踏まえた今後の区役所の方針を作っていかなければならないと考えている。
- ・ 今回は、将来にわたる様々な内容の議論をお願いしたい。

<座長>

- ・ 本日は、左京区基本計画に基づく左京区のまちづくりに関して、「昨年度の取組内容」、「今年度の取組予定」、喫緊の課題である「人口減少対策」について御意見をいただきたい。
- ・ 市基本構想が終わりを迎えるため、これから松井市長の下、新たな25年間の長期ビジョンを計画する。キーワードは、市長が様々なところでお話されている「新しい公共」「市民一人ひと

とりが役割を果たす市民参加型のまちづくり」「全ての人に居場所と出番を」。公務員だけが公共を担っているのではなく、市民一人ひとりが公共であり、市民がどこまで責任を持つかによって、その社会の質が決まってくる。役所頼みをやめ市民自らが動く、そして周りの市民が変わり、世論が変わり、世の中が変わり、役所が変わるというサイクルとなる。

- ・ 本会議に出席の皆様は、地域において重要な役割を担っておられ、子育てや北部山間地域の問題等、それらの解決に向け尽力されている。本日は、各々の立場から御意見をいただきたい。また、今後も変わることなく、皆様がそれぞれ地域での役割を担っていただきたい。

<事務局>

- ・ 「左京区基本計画（第3期）令和5年度の取組状況」及び「令和6年度持続可能なまちづくり支援事業予算」について説明。

<座長>

- ・ 左京区の特徴は、自然が豊かであり、文化的な蓄積が多いところ。その二つは「暮らしやすさ」に繋がる特徴であり、その良さをいかに市民の皆様を感じていただくことができるかが課題である。特に、子ども、左京区に來ている学生、子育て世代に享受いただきたいと考えている。
- ・ 左京区では、北部山間地域の魅力づくり、地域振興、子育てに関する取組等、様々やってきたつもりではあるが出生率回復に繋がるかという点と難しい。答えは分からないが、これまでの事業では、出生率回復には効果がない、ということは分かってきた。
- ・ 人口減少に関しての議論をする際、根拠が分からない古い常識にとらわれて議論しがちであるため、委員全員がそういう意識をもって議論を行いたい。

<事務局>

- ・ 左京区の人口減少対策事業（「京都市移住・定住応援団」との公民連携の推進事業（地域特性を踏まえた移住・定住促進トライアル事業））について説明。

<座長>

- ・ 京都市全体の人口が減少しているわけではない。昔、都心から郊外へ人口流出が起これ、小学校が統廃合した時代があったが、現在は都心回帰の時代。左京区においても、北部山間地域が衰退し、南部が賑わっている状況。

<副座長>

- ・ 定住・移住の取組等、人口減少対策は日本全国どの地域でも取り組んでいる。いわば、少ないパイの取合いになってしまうことを考えると、京都市外から来ていただくのは歓迎だが、そこに重きを置くべきか、冷静に考える必要がある。
- ・ 最初から特別なスキルを持っている人を呼ぶとか、大きな資本を呼んでくるとかではなく、まず重要なのは、暮らしている人の生活の質を上げていくこと。地域の方の望むライフスタイルを実現するための取組、大切にしている価値をみんなで高めていくような取組を優先的に行うべきである。続けていくと、結果として人がやってくる。いわゆるサステナブルシティと言

われている欧米の都市も、外から人を呼び込むのではなく、今の暮らしを良くすることに注力しており、結果としてクリエイティブな人等、様々な人が移り住んでいる。

- ・ 文化、歴史の蓄積や人の豊かさが左京区にはあると思う。それを求めて左京区にやってくる方は、その価値を共有したいと思っている人も多く、クリエイティブな方が多い印象。クリエイティブな方が多いと、良質な労働市場が生まれ、ビジネスをしたい方が集まってくる。定住移住施策を否定するわけではないが、まず、外の人ではなく、中の人に目を向けて議論することが重要である。

<熊谷委員>

- ・ 久しぶりに左京区の地元に戻ってきたら、家は残っているがお年寄りが多くなっていた。地蔵盆に子どもがあまりいないことにショックを受け、寂れた印象を抱いた。
- ・ テレビを見ていると、移住に関するものや、田舎で子どもを育てようという番組が多い。今の子育て世代は、自然の中で暮らしたいという傾向があるのではないかと思う。北部山間地域は、そういう思いの方にぴったりの場所である。まずは中からという話もあったが、この素晴らしい地域の魅力を外に向けていかに発信しアピールするかということも重要だと考える。

<廣瀬委員>

- ・ 大原で子ども向けの体験農園を月2、3回運営しており、子育て世代が自然に興味を持っていると実際に感じている。体験農園では申し込みが殺到し、キャンセル待ちになることもある。今後も継続して活動していきたいと思っているが、子どもの数の減少は危惧している。今はキャンセル待ちが出るほどだが、10年後はどうなっているかわからない。今後は、インバウンドにも力を入れていかないといけないと考えている。
- ・ 活動が続けることによって「大原はとてもしいところ」と思っただけのような若い世代を増やしていきたいと考えている。

<岡本委員>

- ・ 大原地域は、観光の分散化の影響もあってか、ありがたいことに観光客がかなり増えている。京都バスも始発から満員になっている状況。
- ・ まずは若い世代の方に住んでいただき、子どもが学校に通うことで地域が豊かになると考えている。一時期は子どもの数が減り、平成20年度に小中一貫校となった。当時は生徒数が88人だったが、現在は100人を超えている。
- ・ 他都市から引っ越してきた方もおり、在宅で働きながら子育てをされている。また、新規就農者13人のうち11人の方が定着して11年になる。大原地域で農業をされる方も増えており、農地が足りないぐらいである。
- ・ 移住先の条件としては、働く場所があり、若い人が住むのに申し分ない環境があるというのが基本だが、5、6年前の下水道等の基盤整備が人口増に更に拍車をかけてくれたように思う。
- ・ 地域の各種団体がしっかりと連携し、新しく来られた方を快く受け入れる体制づくりが地域には必要である。若い人に来ていただくためにも、地域の意識改革、受け入れることに対する考えの統一化が重要である。

- ・ 移住希望者は、それなりの生活スペースがあって、少し畑が出来るくらいの規模を求められているが、大原には大きい家が多いため、家の改装等について地域の人たちで少しずつ援助の方法を考えている。

<座長>

- ・ 大原地域において、地域をあげて子どもの教育に力を入れたのは大きなポイント。
- ・ 昔は大原等の農村部では、先祖代々の家売る、貸すということはほとんどなかった。それが、現在は地域の方が「家が大きすぎて借りてもらえない」という悩みを持つぐらいになっている。それだけ地域の認識が変わったということ。全国で問題となっている空き家対策という観点では、大原地域は乗り越えたと言える。世話役となる人が、新しい人に住んでもらえる家を一生懸命探して、地元の人がフォローするというのは全国単位で見てもかなり努力している事例である。

<長谷川委員>

- ・ 私が住んでいる地域では、毎年、子どもが2割～3割減っているのを実感している。一方で高齢者は8割ほどを占める。
- ・ 空き家の数が増え、中国の方が多く住むようになったため、このまちがどういうまちか説明をし、この町内で何をしたいか伺っている。今は地蔵盆を止め、フェスタという形で水餃子を作ってもらなど、町内で国際交流を行っている。地域を身近に感じてもらい、いわゆるハウスクールではなく、現地の小学校に入学してもらいたいと考えている。小学校の入学式に行ったが、30人弱ぐらいしか新入生がいなかった。また、小学生の概ね3分の1はハーフ。我々大人もそういう状況を理解していかないといけない。この地域で良いところは、京都朝鮮中高級学校があり、子ども達が交流していること。今年から、高校生には大文字の送り火に協力してもらおうことになっている。昔は後継ぎ仕事として実施していたことを、新しい居住者に条件付けしようと思うと、この地域に人は来なくなると思う。
- ・ 土地利用に際して、家屋にしても土地にしても何かするとなると必ず規制がかかる。事業をする際には、条例等を確認しながら配慮して行っていく必要がある。土地について、建蔽率の問題で売買できないところもある。
- ・ 地域の土産物屋等も高齢化で商売をやめ、そこに外資系の企業が入ってきている。そのような地域であるため、家族単位で新しい人は入ってこない傾向。企業ばかりが入れ替わり、夜になると人が居なくなる。
- ・ 子どもと大人の関係で重要なことは、「十分に子どもと話し、子どもの話を聞くこと」。大人が子どもとしっかりと付き合っ、どのように関係づくりをしていくのか、今一度考え直さないといけない。今の子どもが何を求めているか、大人がしっかり理解して、子どもを前に出して、我々大人が支えていく状況を作っていないと、どんどん人口が減っていくのではないかと考える。我々は昔話をするのではなく、今一度新しいものを吸収して、その芽が出るような支えにならないといけない。
- ・ これまで左京区は、机の上で議論をするのではなく、現地に実際行ってみようというやり方をしてきたので、再度北部山間地域でこの委員会を開催していただきたい。地域の人にも参画していただき、どんどん意見を出してもらいたい。

<座長>

- ・ 先進国の例でいうと、人口の減少分は基本的に移民で補っている。多文化共生とは、お互いの違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら地域社会の構成員としてともに生きていくこと。文化を理解し馴染んでもらう時に有効なのが、伝統行事や文化遺産であり、一緒に体験してらうことで交流が生まれる。昔、お盆の行事は父親と長男しか携われなかったが、今は状況が変わってきている。委員のお話から、世界に誇れるぐらいレベルの高いことをしていると感じる。

<上田委員>

- ・ 花脊地域で空き家が増えている。地元の立場で申し上げると、子どもがいる夫婦世帯に来ていただけたらありがたいと考えている。花脊は地元の子どもの数は少ないが、スクールバスで通っている方もいる。
- ・ 花背地域では、バスは1日2便、観光バスが通れる道路もなく、ライフラインはやっと繋がったが下水はまだという状態。交通網は非常に重要だと考えており、これまでからもトンネルを作ってほしいと伝えている。道が良くなれば発展するものと考えている。

<中野委員>

- ・ 花脊地域のPTAでアンケートを実施したところ、地域を良くしたいと思う保護者が多くおり、非常に良いことだと考えている。
- ・ 花背地域は、保育所に関しても課題がある。去年は6人の子どもがいたが、今年は4人、来年には現時点で3人の予定。3人で保育園を維持するのは不可能である。地元から「保育所が無いと、若い人が外から来ないのでは」という意見もあった。
- ・ 左京区の基本計画では「自然」を打ち出している。自然は、その場所に「人」が居ないと守れないと思う。

<河野委員>

- ・ 岩倉南学区について、中心部より少し安く家が購入でき、ゆったりとした住環境があるため、人口が増えていると考えている。また、岩倉南小学校には「いい学校だ」というイメージもあり、岩倉自体がブランド化されている。
- ・ 多世代間交流等も大切だが、同世代同士のコミュニティが無いと人口は増えない。岩倉は、同じ時期に分譲地が開発され、子どもを産みたい世代が入ってきた。
- ・ 土地の価格は調整できるものではないので難しいところではあるが、定住してもらうには住みたいと思えるポイントが必要。近くで働ける場所があること、何か困ったことがあった際に頼れる業者が近くにいることなどを情報発信することも大切。左京区は住みやすく、子どもを産んで育てる環境として良い場所だと思うので、住みたいと思っている若い世代は多いだろう。情報発信含め、中小企業家同友会としてもサポートしていきたい。

<藤森委員>

- ・ 京都は落ち着いた良いまちという印象が強く、近所の方たちがお互いに仲良くしようと思っているところに感動している。自身としても、近所の方との挨拶や日常的な会話から人の繋がりを感している。

<熊谷委員>

- ・ 大学が多いため、大文字送り火等の伝統行事への参加を、授業単位の必須にして取り込むなど、そういったところから京都の文化を理解していただき、卒業してからも京都で生活していくという動きになればいいのではないかと思う。

<副座長>

- ・ 行政の定住移住の取組は、一般的に「移住者に対する補助金交付」や「保育料や学費の無償化」が多い。そういった取組で人が集まっても、他の良い条件の地域へすぐ出て行ってしまう。
- ・ 外から来る人たちに対してウェルカムになるためには、地域の暮らしや大切にしている価値がちゃんと地域内で共有できているということが条件だと思う。新しい地域で暮らす際、様々な不安があるため「自分たちが受け入れられている」という実感が欲しい。オーバーツーリズムで地元の暮らしが悪化することになると「観光客ウェルカムですよ」と打ち出しても、地域の方が寛容になれないし本当の意味でウェルカムな環境は作れない。
- ・ 他の委員の言うように、大人には目を向けてるが子どもに目を向けることができていないため、次世代の声に目や耳を傾けることがかなり大切だと思う。現世代の常識が次世代の非常識みたいなことは多くあるはずなので、そのような視点を持ってまちづくりを考えていかなければならない。
- ・ 左京区は、岡崎のような文化施設の集まる地域もあれば、北部山間地域もあり、様々な環境や資源に恵まれている。まずは、左京区の中で色々交流をしていき、中の人が生き生きと暮らすことで、その暮らしを見た外の人が、左京区に来たいと思うようになるのではないか。

<座長>

- ・ 人口減少というのは、そもそも現象であって、社会問題ではない。成熟した社会になればなるほど、人口は減少するものであり、すでに欧米諸国は経験済みである。欧米先進国では、中古住宅の市場が大きくなっている。都心回帰が起こり、歴史的な都市に人が集まることとなるが、歴史文化を持ったきれいなまちであるが故に、規制が必要になる。規制を緩めた方が人口増にはなるが、きちんと規制し、シティプライドを上げないとまちとして生き残れなくなる。より良い社会をつくるというのが大きなポイントである。

<事務局>

- ・ 本日様々ないただいた御意見について、これからの取組みに活かしていきたい。
- ・ 先ほど、委員から話のあった花脊地域のPTAへのアンケートに少し関わらせていただき、子育て世代の方が「地域の子どもが減っていること」に危機感を感じていることが分かった。「無いものは多いが無い中でも幸せに暮らしていくことはできるのではないか、そのためには、まず中の人同士で仲良く暮らしていきたい」という意見もあった。

- ・ 左京区全体の人口は１６万人であり、その内、花脊、別所、久多等の北部山間地域の人口は約３００人。北部山間地域では、顔の見える規模のまちでどのようなことが出来るのか、その解像度を上げていかないといけないと感じている。

<区長>

- ・ 我々行政職員は数年ごとに人事異動があるため、どうしても地域に対して一から感情や想いを入れる必要がある。それに比べ地域の方々はずっと持ち続けている思いがある。それをしっかり受けとめる京都市であり左京区であり、その思いを踏まえて地域の皆様と左京区に住んでよかったと思えるまちにしていきたいと思っている。これからも様々な場面で御意見をいただき、一緒に議論できればより良い地域なると思うので、引き続きよろしくお願いしたい。